

『経済学批判』の批判

馬場 宏 二

2004年4月2日～5月2日

表題は羊頭である。狗肉まで目一杯に記せば、「カール・マルクス『経済学批判』の中の最長の註に含まれる奇妙な論点の批判的検討」となる。『経済学批判』の全体でなく、一つの註の一部分を問題にしようと言うのである。

この註は、本文ともどもペティ称揚の意義を持つ。それを確認すること自体ひとつの仕事になる。が、さらに関心を惹くのがマカロック論難の奇妙さである。本稿は結局それに向かって絞り込まれる。

一見好事家的詮索である。確かに理論的深化を直接に狙ったものではない。だがここは、マルクスによるペティ発掘成果の、初の本格的公表である。それでいながら、そこに組み込まれたマカロック論難には、論理を簡単に追い切れない捻れが含まれており、それがマルクスのマカロックに対する心情的屈折を表現したものと解し得る。前稿「『資本論』も読み方」⁽¹⁾の続編として、この点の考察を欠くことはできない。

古典読解の際、文面や用語の穿鑿に凝るのは筆者の好みではない。だがここでは穿鑿もいささかは必要になる。そのため、主として手許の諸版⁽²⁾によって、多少の各版異同や諸邦訳間の用語の比較を試みることにする。

I. 註16の特定

通常の版では、これは註16として、第一章「商品」中のA「商品の分析に関する学説史」に付されている。但し16の数字は、現行の『マルクスエンゲルス全集』にはない。マルクス自ら出版した1859年の初版『経済学批判』には番号がなかったらしく、1897年のカウツキー版にもない。通しの註番号が入ったのは1934年のインスティトゥート版、別名アドラ

ツキー版かららしい。以後それが踏襲されて来たのが、戦後の全集版で初版の形式に戻されたものと思われる⁽³⁾。

内容には直接関わらない点だが、通常全集版に依拠するのが便利なのに、この場合は逆に指示するのに不便が生じる。以下便宜上、全集版を利用する際も含めて、註16と呼ぶことにしておく。

この註16、際立って長い。文字数換算で、全集版なら本文2ページ余りを占めることになる。註は計148付されているが、他にはこの半分の長さの註さえない。こう特別に長いと、マルクスが特に力を込めて書いたと推測したくなる。主題がペティであるからなおさらである。

II. ペティ称揚

註の主内容はWilliam Petty (1623-1687) の学説の賞賛である。いきなり全文を引用するには長すぎるからひとまず要約する。第一章Aは、古典派経済学が労働の二重性を発見したことから始め、リカードに至る諸説を個別に論評する。その筆頭がペティである。ペティ説の分業論に註16が付される。註ではペティの分業把握がスミスより大規模だとホメ、スペクテイター紙が彼を引用していると喜び、それに関するマカロックの「憶測」の「あやまり」を指摘する。ついで『政治算術』に拠りつつ、ペティの方法の独創性・議論の天才的な大胆さ・独特のユーモアを例を挙げて示し、その中でペティの、商業は宗教的には異端部分に属すという認識を紹介する。そしてペティの著作は既に稀覯本化しており、子孫が名家なのに全集が出ない⁽⁴⁾のは、序文で彼の性格のまずい点に触れざるを得ないからだろうと皮肉る。ペティの人物と学説を良く掴んだ上で、学説の重要性を周知させようとした文章である。それゆえ異例に長い註になったわけである。

もともと筆者はこの中のマカロック論難に疑問があり、それを解読するために改めてこの辺り全体を読み直した。その際突然、ここは忘れられかけていたペティをマルクスが独創的な視角から発掘し、自ら捉えたその真価を世に知らしめようとした文章だったのではないかと気づいたのである。

この着想をどこまで強調すべきかは判らない。学説史家の素養が全くないので、この意

味づけが斬新有意か否か判断出来ないからである⁽⁵⁾。しかしこの註が、二重の意味でいささかの重味を持つことは指摘しておいて良いように思う。

まず、『経済学批判』が出版された19世紀中葉には、ペティは忘れられかけていた。17世紀末にはペティと関わる、政治算術論者とでも言うべき作家達がいた。グラントやグレゴリー・キングのような統計家、また、後にトーリー・リベラルと総称される、ダッドリー・ノース、ジョサイア・チャイルド、チャールズ・ダヴィナントらである。人脈はここで切れるが、18世紀冒頭には、ペティの影響を強く受けた有力な理論家、ヘンリー・マーチンとリシャール・カンティヨンがいた。もっとも二人とも同時代的には全く埋もれたままだったから、ペティ復活には至りようもなく、おそらく18世紀半ばともなればペティはあらかた忘れられていたであろう。それに駄目を押したのが18世紀末からのいわゆる古典派経済学だった。ジェームズ・スチュアートはペティの名を一度だけ挙げた⁽⁶⁾が、アダム・スミスは全く挙げない⁽⁷⁾ばかりか政治算術に露骨な不信を表明した⁽⁸⁾。デイヴィッド・リカードは、論理の質はペティに近いところがあるにも拘らず、経済学史に無関心なせい、その名を挙げていない。

こうして19世紀半ばはペティ忘却の時代になっていた。もっとも、マカロック (J.R. McCulloch, 1789-1867) はなおペティを重視していた。『経済学原理』では労働価値説の始祖とした⁽⁹⁾。『経済学文献分類目録』ではペティの主要作をほぼ紹介している⁽¹⁰⁾。マカロックは経済学・学者として時代の大家であり、この著は便利な読書案内だったから、経済学通俗化・普及時代にあったイギリスの知的社会にはある程度影響があったであろう。だがその裏面で理論的前進を止めた主流経済学界には、改めてペティ発掘を志す清新な創造力が失われていたように見える。J.S.ミル『経済学原理』1848年やS.ジェヴォンズ『経済学理論』1871年にはペティの名は登場しない。もっと後の、博識誠実なA.マーシャルの『経済学原理』1890年でようやく取り上げられている。

この忘却の時代に、思想も手法も全く異なる二人のドイツ人が同時にペティを取り上げた。すなわちマルクスとロツシャーである。ヴィルヘルム・ロツシャーは『英国経済学史論』⁽¹¹⁾の中で11章中1章をペティに充てている。マカロック『経済学文献分類目録』を下敷きにした教科書風な紹介だが、人物著作の概要は一通り解かるように述べている。マルクスがこれを読んだ痕跡はない。

つぎに、マルクス自身の経済学研究から見てもこの註は重要な位置にある⁽¹²⁾。彼は1845年、英語による経済学の事始めとしてペティを読んでいる⁽¹³⁾。内的に共鳴するところがあったのであろう。ペティはその後も労働価値説を機軸とするマルクスの理論形成を促す有力な刺激となり続けたかに見える。1847年の『哲学の貧困』ではペティに関する蘊蓄を僅かに覗かせた⁽¹⁴⁾。纏めて世に問う機会は『経済学批判』の出版によって訪れた。その後、1867年の『資本論』第一巻にはペティの名は20回近く現れる。ほとんどが文献引用か断片的な言及だが賞賛が続く。エンゲルス『反デューリング論』中で経済学の歴史を扱った第十章はマルクスが書いたもので、ペティを重視している。1878年刊行だから『経済学批判』より20年近く後である。この他、今日著書扱いされる、1857-8年のノート『経済学批判要綱』には断片的ながらいくつかの言及があり、1861-3年のノート『剰余価値学説史』は、二箇所互って、特に第一巻付録二に、やや纏まった叙述があるが、いずれも公表するつもりで書いたものではない。

『経済学批判』のペティに関する記述は満を持して放たれたと言って良いのだが、無論、反響は芳しいものではなかった。この書は1000部刷っただけでマルクス生前には再版されなかった。カウツキー版が出たのはマルクス主義運動が大衆化してからである。『経済学批判』が『資本論』ほどにも学界に影響しなかったろうことは容易に推測出来る。そもそもマルクスは、経済学教授でもなく著名な文筆家でもなく経済学クラブの会員でもなく、学問好きな無名の亡命者に過ぎなかった。その著作がいかに高度の学説研究を含んでいても、その衝撃はイギリスの知的世界に容易に届かなかったであろう。ドイツ語で書かれたからにはなおさらである。この後ペティを重視したのは、マルクス主義学派あるいはマルクスの影響を強く受けた学史家達だった。

ペティ著作集を編集したハルは、その必要を唱えた人としてマカロック・イングラム・ロッシヤーを挙げたがマルクスは挙げていない⁽¹⁴⁾。手許の著作で拾うと、ジイド・リストの『経済学説史』⁽¹⁵⁾はペティの名を一度挙げただけである。シュムペーター『経済分析の歴史』⁽¹⁶⁾はペティに敬意を表しているが、それはロッシヤーとマルクス双方が同時にペティを評価したとの認識に発している。例外的にペティに詳しいのはエリック・ロールの『経済学説史』⁽¹⁷⁾で、これにはマルクスの影響が濃厚に見られる。松川七郎『ウィリアム・ペティ』⁽¹⁸⁾は国際的評価のある高水準の労作だが、外見以上に強いマルクスの影響下に書か

れている。ロンカリア⁹⁸もマルクスの影響下にペティ研究を進めたものと見られる。

念のためにかつてのマルクス主義陣営の理解⁹⁹を見ておくと、いわば尽くマルクスの文章の引き写しに他ならない。それも主としては、マルクス自身が定式風書き直した『反デューリング論』に依拠しており、究極の根源は結局『経済学批判』のこの註だったと言って良い。

註16におけるペティ論の持つ意味は、以上でおおよそ明らかであろう。

Ⅲ. マカロック論難

この際のマカロック論難には、自説の邪魔を除く意味はあった。本文の冷静な論評に比べると、註は感性的な賛辞の羅列である。冒頭でペティ分業論をホメた。その後、ペティの理論に独創的・天才的・大胆・ユーモアと滅多にない派手な賛辞を呈した。ここでは、ペティの偉大さを割り引くような言説は許容し難かったろう。自らも人物を皮肉ったが、こちらはいわば別件である。

もうすこし詳しく見るために、邦訳全集版から該当箇所をそっくり引用する。

…ペティは分業を生産力としても、しかもアダム・スミスよりももっと大規模な構想で展開した。『人類繁殖にかんする試論うんぬん』第三版1686年、35-36ページを参照。彼はこの書物のなかで、のちにアダム・スミスがピンの製造についてやったように、生産にとっての分業の利益を懐中時計の製造について示しただけでなく、同時にまた一都市や一国全体を大工場施設という観点から考察することによっても示している。1711年11月26日付の「スペクテイター」は、この「すばらしいサー・ウィリアム・ペティの例証 [“illustration of the admirable Sir William Petty”] にふれている。だからマカロックが「スペクテイター」はペティと四〇歳ほども若い一著述家とを混同していると憶測したのはまちがいである（マカロック『経済学文献、分類目録』ロンドン、1845年、102ページ）…

念のため旧国民文庫版と岩波文庫版を参照したが、訳文に微妙なズレがある。全集版でふれているとある箇所は他の邦訳では二つとも引用しているである。原文は“bezieht sich auf”であり、マルクスは引用と言いたかったのだからが事実としてはふれているが良い。「混同していると憶測したのはまちがい」は、他の邦訳でも全く同義になる。原文は、

McCulloch vermutet also fälschlich, daß der “Spektator” Petty mit einem 40 Jahre jüngern Schrifteller verwechseltである。ペティと四〇歳ほども若い一著述家とを混同していると憶測し、は岩波文庫版では混同していると推定しになっているが、これはさほど問題はあるまい。40歳若い著述家が実はヘンリー・マーチンであることを押さえておけば足りる。

もう一箇所異なるのはマカロックの本からのマルクスの引用ページである。この穿鑿には多少意味がある。全集版の102ページが正しい。他の二邦訳も手許のドイツ語版も105ページとしているが、マカロックの原本に照らすと、105ページは全く別の書に関する記述だから意味がなくなる。なぜ105ページになっていたかは推測するしかないが、『経済学批判』初版が105ページと誤植し、マルクスが気づいて自家本に102ページと書き込んでおいたものが見落とされ、戦後の全集版でようやく気付かれたのであろう⁹³。内容的には102ページだと解するほかはない。ここマカロックの原本102ページを読んでいたことが明示されるのは、マルクスにとって好都合なことではないが。

マルクスが挙げたペティの書について二点補っておく。(1).これがマルクスにとって経済学事始めだったようだ⁹⁴。そのため強い印象を受け、詳しく記憶していたであろう。だからマカロックの行過ぎがすぐ見え、鋭く論難した。が、それが奇妙に捻れた。(2).マルクスは書名を略示した。原本入手難の今日では『人類の繁殖に関する試論並びにロンドン市の成長に関する政治算術別論』と完全表示してないと、肝心の時計分業論や都市間分業論に到達できない。因に「政治算術別論」は参照可能だが、「繁殖に関する試論」の方は原文が見出せない。

おそらくマルクスは、スペクテイター紙が全面的にペティに依拠したと、願望交じりに速断したのである。ところがマカロックがそれを否定していた。その論拠を崩せなかったので、マカロックがスペクテイターは二人を混同したと「憶測した」などと捻ることになった。論難の成否を判定するには、マカロックの言い分を見ておかなければならない。

IV. マカロックのマーチン称揚

マカロックの『経済学文献、分類目録』⁹⁵は、文献一点当たり、見出し・解説ともで平均半ページ弱で紹介している。単独最長が無署名のパンフレット『東インド貿易の諸考

察』²¹、激賞と引き写しを含む紹介で三ページ半に達する。因にマカロック編『イギリス初期貿易論選集』²²の中には、激賞の駄目押しとともにこの『諸考察』の全文が収録されている。マカロックがこの冊子に熱中していたことが良く判る。初版の『東インド貿易の諸考察』も再版の『イングラントにとっての東インド貿易の諸利益』も稀覯本化していたため、後代の研究者はたいてい、マカロック編のこの論集で読むことになった。これは彼の貢献である。

さてこの『経済学文献』の99-103ページが『東インド貿易の諸考察』-以下『諸考察』と略称-の紹介である。この102ページのうちから、当面の論点に関わりのある三つのパラグラフを訳出する。

…各々の製造業で職人が多くなるほど個人の熟練に残るものは少なくなる。各々の仕事の秩序と規律が増し、同じ仕事が少ない時間で出来るようになる。賃金は減らさるべきではないが、労働は減り従って労働費は少なくなる。一片の布は多くの職人の手で作られる。あるものは梳き、また紡ぎ、他は織機を作り、他は織り、他は染め、他は布を仕上げる。こうして適当な仕事に適当な職人が配置される。仕事が一定して専門になれば、織工が独りで梳き、紡ぎ、織機作りし、織り、仕上げ、染めて布を作るばあいより、遙に巧妙かつ急速に仕事をするであろう。従って紡工、縮充工、染色工、製布工も、各々が特定の定まった任務に従事する場合には、技能が他の仕事のそれと混交し当惑しながら同じ仕事をする場合に比べて²³ずっと巧妙急速に作業するであろう。

懐中時計は極めて多様な仕事の産物である。一人の職人がいくつもの部品全てを作り、最後にそれらを一つに組み合わせることもできる。しかし懐中時計の需要が大変多くなって時計の諸部品と同じ数の人を恒常的に雇うことが出来、各人が特定の仕事に恒常的に割り付けられ、各人がケースだけ、他は車Weelだけ、他はピンだけ、他はねじscrewだけ、その他の何人かもそれぞれ固有の仕事だけで済み、これらの諸部品を一つに組み立てるのも一人の特定の恒常的な仕事となるならば、この人の作業は必ず、これらの部品全てを一人で製造にするのに比べて、諸部品の組み立てにおいて巧妙高速になるであろう。同様にピン工、製車工、ねじ工、その他の部品職人も、一人が時計製造の多様な仕事全てに従事し技能に当惑する場合にくらべて、他におこなうべきことがなくてその技能に悩むだけの場合には²³、必ず特定の仕事をずっと完全高速にできるに違いない…。

なお、以上二つのパラグラフは『諸考察』68-70ページの引き写しである。だが次にマカロック自身の文章が来る。問題はそこに集中する。

…1711年11月26日刊行のスペクテイター232号には、複合的な仕事の異なった部分に異なった人々を用いることで労働と経費の節約がもたらされる事例として、懐中時計の製造が取り上げられている。スペクテイター紙の筆者（Henry Martyn氏と想像される）は、この事例を「すばらしいサー・ウィリアム・ペティ」から借りたと述べている。しかし、われわれが読んだ範囲では、ペティの著作にはかような例はない。そして、おそらくこの例は、今言及しつつあるパンフレット、ペティのものではないことが確かなパンフレットから採られたものである…

マルクスが彼の註16で取り上げたのがまさにこの箇所である。

V. マルクスの歪み

マルクスのマカロック論難は、文面・論理とも捻じれが多く、難解で強引なばかりか的外れがある。論理的に詰めると、かえってマルクス自身の傷を暴くことにもなる奇妙な批判文である。

マルクスの言い分を要約すればこうなる。マカロックはスペクテイター紙がペティとマーチンとを混同していると「憶測」した。だがスペクテイター紙はペティを引用しているのだから、この「憶測」はあやまりである。

これは形式的にも批判の体をなさない。「スペクテイターはペティを引用した。マカロックはスペクテイターがペティを引用していないと言うから誤りだ」と責めるなら照準が合う。実際マカロックはそう言っている。後はスペクテイターの内容を検証すれば決着が着く。ところがマルクスはこの正攻法を避けて、スペクテイターがペティとマーチンを混同したと憶測したからマカロックはあやまりだと、搦め手に出てしまった。なぜか？全面的にペティを引用したのではないことに気づいたのだとでも考える他はないが、それがかえって不利に陥る途だった。

マカロックはスペクテイターが混同したなどとは言っていない。スペクテイターのこの号の筆者はヘンリー・マーチンだと捉えており、マーチンがペティから借りたと称した時

計製造における分業の事例は、今紹介している『諸考察』の中にあるのだと指摘し、『諸考察』の筆者はマーチンだろうと推論しながら、推論の結語を書かなかったのである。筆者はマーチンだと思われるスペクテイター紙の記事と、筆者不明の『諸考察』の内容とが共通だから『諸考察』の著者はマーチンだろう、と示唆しながら明記しなかった。この態度はなお続き、11年後の『イギリス初期貿易論選集』の編者序文でも、「私たちはしばしばこれがヘンリー・マーチン氏の筆になったものと半ば想像しそうになった」²⁴と、マーチン説を唱えながら断定しなかった。慎重だったのか当時は当然の表現形式だったのか。

因にこの『諸考察』の著者は、1926年のP.J. トーマス²⁵の考証を踏まえた1983年のC. マクラウド²⁶の考証によって、現在ではヘンリー・マーチンHenry Martyn (1665-1721)であることがほぼ確定している。ここに至るまではノース説も現れ、著者名確定は簡単ではなかった。マカロックの上記引用文は、おそらくマーチン説の嚆矢である。主旨が『諸考察』の紹介なのだから、その著者について最大限の推定を試みたのであり、紹介者としては当然の作業である。その推定は、一世紀余り後には正しかったことがほぼ確定した。

マルクスは、そもそもマカロックのこの意図を素直に読み取っていない。マカロックの主旨が『諸考察』の紹介であること自体を、故意にか不注意でか無視した。当然、『諸考察』の著者はヘンリー・マーチンだと推測出来る根拠がスペクテイター紙にあると言う指摘の意味が判らなくなり、「マカロックは、せっかくのペティの代わりにマーチンを持ち出したくらいだから、スペクテイター紙がペティとマーチンを「混同」していると「憶測」したのだろう」と、牽強付会した。マーチンの名を無視したくらいだから、スペクテイターの筆者マーチンがペティの名で自説を書くことがあるなどとは想像しなかったのだろう。

スペクテイター紙の記事は、後に詳しく見るように、ペティから引用したと称しながら直接ペティに照応する要素は時計部品の名だけで、論理の大筋はむしろマーチンの自著『諸考察』に照応し、それを敷衍したものである。これはマーチンのペティに対する表敬だったか、謙譲による偽装だったであろう。マカロックは、混同していない文章を混同したと推定したのではない。強いて言えば、自己「混同」を見破った上で訂正を主張したのである。『諸考察』の著者をマーチンだと唱えるためには、スペクテイター紙のマーチンに、事例をペティから引いたと言われては不都合である。自分の知識の範囲では、事例はペティ由来でなく『諸考察』由来だと訂正したのである。時計分業の例は「政治算術別論」

にも『諸考察』にもある。マカロックは前者を失念していたのであろう。

マルクスがマカロックは誤りだと言い切るには、スペクテイター紙の記事がペティに全面的に依拠していると言わねばならない。記事のうちの懐中時計の部品名は『諸考察』よりもペティ「政治算術別論」に近い。だが記事の基本、需要による分業促進と分業による価格低下＝需要拡大に関わる叙述は、そのままの形ではペティのこの論文には含まれず、『諸考察』にある要素がスペクテイター紙で更に強調されたものになっている。マルクスは経済学事始めに当るペティのこの小論を詳しく覚えており²⁷⁾、鮮明な記憶とスペクテイター紙の時計部品の名称が一致したため、同紙の記事は全てペティに拠ると速断してしまったのであろう。そのため、同紙は『諸考察』に拠るのだと指摘したマカロックは誤ったと断罪した。実はマルクスの方が、マカロックが挙げた『諸考察』をきちんと読んでいなかったために、マカロックの正当性を見出せなかったのである²⁸⁾。

こうしてマルクスはマカロックの言い分をねじ曲げた上で、マカロックは誤ったと大将首を取ったような凱歌を挙げた。この論難に、相手の無知を咎め自らの知識を誇示する意味はあるが、マカロックの記憶が不完全なことはこの際些細な論点である。強引に貶めたために、偏見の強さと自らの無知不注意を曝す結果になった。獲れたのは案山子の首程度で、返り傷の方が大きいのである。

マカロックの議論にも行過ぎがあった。時計部品の名称に関する限り、スペクテイター紙と、マルクスが^{...}etc.として挙げた「政治算術別論」とは一致する。それでもスペクテイターの記事はペティ由来でなく『諸考察』由来だと頑張ることも出来なくはないが、「われわれが読んだ限り…ペティには存在しない」と全否定してしまうと、ペティが時計分業を全く述べなかったことになる。それだとマルクスの告発とは別の意味だが、誤りである。もっとも、問題はそこではなくて、闇雲にマカロックをやっつけたくなるマルクス的心情の方にあるのだが。

闇雲にマカロックを非難したくなるマルクスのこの偏見は、すでに述べたことがあるいくつかの論点²⁹⁾と重ねて見ると、一層疑いようがなくなる。

第一。上記『経済学批判』註16は、マーチンの名を出しておいた方がはるかに明快になる。「四〇歳ほども若い一著作者」などと持って回るより、「ヘンリー・マーチンと推測されている著作者」と書く方がずっと判り易い。マーチンがペティより40歳ほど若いのは事

実で、しかもマカロックが書いてないことだから、それを掴んでいたマルクスの探索がなかなかのものだったことは判る。だがマルクスがマーチンに関する知識を誇るにしても、マーチンの名や著作を先に示していたマカロックに対して、その考証に表敬した上で自己の知見で補足するのが常道である。マカロックをホメたくないばかりに、書けば話が明晰になるマーチンの名を敢えて書かなかったのではないか。

第二。マルクスはこのパンフレットの初版名“Considerations upon the East India trade” 1701は先刻御承知だった。マカロックの『経済学文献』99ページには、まず見出しとしてこの初版名をゴチック体で記し、そのすぐ下に「新タイトルページ付き、しかしその他は全く変更なしで」との解説付きで、“Advantages of the East India Trade to England” 1720との再版名を、同じポイントの通常体の活字で記してある。102ページの中身を読んでいて99ページの見出しの書名を読まないことはまず有り得ないから、初版名は当然に知っているはずである。ところがマルクスは『経済学批判』註16では、『諸考察』の書名を全く挙げておらず、そもそも『経済学文献』の引用箇所がこの『諸考察』の紹介記事であることさえ全く示していない。示した方がずっと話を整理し易くなるのに示さないのだから、マカロックのおかげでパンフレットの書名が判ったこと自体を書きたくなかったに違いない³⁹。

第三。そういえば問題のスペクテイターも、日付だけで号数を落としている。ここはいささか勘繰りめくが、マカロックのおかげで判ったといたくない現れかも知れない。

第四。『資本論』には、このパンフレットは都合7回、それも一度はスミスを越えるとの賛辞付きで引用されている。ところがそれが尽く再版名『東インド貿易の諸利益』である。マルクスが大英博物館で直接読み得たのは再版本だけだった可能性が高いから、再版名で引くこと自体は差し支えない。だがマカロックによる、スミスを越えるという先行評価やゴシック体の初版名を、知っていながら全く挙げないのは意図的隠蔽である。『経済学批判』でペティを世に示したのだから、『資本論』でマーチンをあれだけホメた以上全面的に世に押し出すのが正道である。マルクスが隠蔽したために、マルクス主義者やマルクス経済学の流れの中でもマーチンは長い間知られずに今日に至ってしまった。マルクスがそうしたのは、マカロックを肯定的に使うことを徹底的に嫌っていたためではないか。

第五。『資本論』では『経済学文献』を一貫して非難するためだけに引用していること

は明らかである。マルクスは、意図的に書いた場合にはマカロックを一回もホメず、逆にそうとう強引な因縁付けまでして非難の対象としていた³⁰。『経済学批判』の中では、註16の他にもう一回マカロックが出てくる。アドラツキー版なら註6に当る箇所である。いわく、「マカロックのような者でさえ、「物質」とその他半ダースものがらくたを価値の要素だと宣言するドイツの「思想家ども」の物神崇拜よりもどれほどすぐれているかがわかる」。管見の限り一方的なマカロック非難でない文章はこれだけである。しかし、この文がある、マカロック以て瞑すべし、と言うわけには行くまい。

VI. 資料的根拠

ここから先は、上記マルクス説の資料的根拠の検討なので、話はさらにややこしくなる。全く形式的に言っても、『経済学批判』の註16を含めると都合5点になる諸文献から該当箇所を引き出して、相互の異同や因果関係を検証しなければならない。すなわち、古い順に、ペティの「政治算術別論」、マーチン『諸考察』、スペクテイター232号、マカロック『経済学文献』。以下なるだけ単純化して述べる。

ペティの「政治算術別論」の内容を、マルクスは、分業の利益を、懐中時計の製造についてだけでなく、一都市、一国全体を大工場施設という見地から考察することによって指摘している、と紹介していた。ところが彼はこれを、『人類の増殖…に関する一論その他』第三版、1686の35-36ページと指示している。この書は今日参照困難だから、この指示だけではペティの原文に到達し難い。偶然、松川七郎『ウィリム・ペティ』³⁸が紹介してくれているのが目にとまったので英文のペティ経済学著作集に遡及出来た。

ややこしいのはこれだけではない。「スペクテイター」紙1711年11月26日（232号）は、時計の部品名に関する限り「すばらしいサー・ウィリアム・ペティ」つまり「政治算術別論」と、順序は異なれ品名は同じであり、この限りでは時計分業の事例をこの作品から引用したとも見得る。だがスペクテイターのマーチンは、「すばらしいサー・ウィリアム・ペティは、彼の著作のいくつかで事例を挙げている。私の記憶しているその一つが懐中時計に関するものでそれは当面の目的に極めて良く適合するので説明したい」と、ペティの名をマクラに使っただけで、厳密に引用をしたのではない。部品名の異同などどうでも良

くなる使い方である。他方、時計に対する需要が大きければ製造過程での分業を進め得て能率が高まるとした論理の筋は、ペティ「別論」よりも『諸考察』の方がはっきりしており、スミスの市場論に連なる後の方だけがマカロックの頭に残ったと解し得る。

スペクテイター232号のマーチンは、分業が生産性を上げる最適例として、「すばらしいサー・ウィリアム・ペティ」がどこかで挙げていた時計製造を借りたのである。ここは素直な表敬であって、自著から引いたのをペティから引いたと意図的に偽装したわけではなからうが、マーチンの中では自分の論理がペティと一体化していた。手元のペティを引用したのでなく記憶で表敬したのだから、記述が「政治算術別論」にあった部品名の不確かな羅列から始まり、いつしかその中に直接書いてない自分の論理へ移っても不思議はない。需要の分業拡大－生産性引き上げ効果は『諸考察』第12章（特にマカロックが自著に引き写した69ページ）に展開している独自の論理であり、スペクテイター232号の叙述はそれを一回り敷衍し明白化したものになっている。マカロックが『諸考察』に由来すると解したのは、基本的には正当だったのである。因にマルクスは「政治算術別論」から、時計分業に続く、地域間（『別論』は小町間・市街間だが、『経済学批判』では都市内・一国内と解している）分業効果を取り出してペティ分業論の大規模さをホメていたが、この部分は「スペクテイター」にも『経済学文献』にもない。『諸考察』にも、明示的には書かれていない。ペティの才を示す意味はあるが、マカロックに対する因縁付けの材料としては使えないようはない。

VII. ペティとマーチン

以下、登場諸文献の該当箇所を掲げる。といっても『経済学批判』註16と、マカロック『経済学文献』の必要部分は既に掲げてあるから、残るは三者である。

*ペティ「政治算術別論」：一

ペティは、『政治算術』³²で、布製造における分業の効果と、航海業の支配者が用途別に船種を使い分けて低運賃を可能にするという、市場が分業を拡大すると言うに近い説を並べて述べていた。マルクスは、この本より前に世に出され、おそらく知られることが少なかった「人類の増殖に関する一試論並びにロンドン市の成長に関する政治算術別論」An

Essay concerning the multiplication of mankind together with another Essay in Political Arithmetick concerning the growth of the city of Londonを英語経済学の事始めに読み⁸³、強い印象を受けていに違いない⁸³。

この論文は、ロンドンの急発展を歴史人口統計的に確認した後、その原因を挙げる中に分業を持ち出す。原因は計12あるが、初めから順に海防、政治、宗教、司法、租税、貿易である。貿易の利は他の産業でもあるが製造業で特に大きいと述べた後に、懐中時計の製造における分業例を持ち出す。

…「懐中時計の製造に際しては、一人が車他がばねを作り、他が文字板を刻み、他がケースを作れば、それぞれが一人で全ての作業をするのに比べて、時計はもっと良くしかも安価にできるであろう」…これだけである。時計部品名はスペクテーター紙にそのまま記述されているが順序は異なる。また、需要が分業を拡大するという論理は直接形では書かれておらず、分業による価格低下が需要を拡大するという論理も出てこない。

この後に地域間分業が出てくる。都市の製造業は相互に拡大しあって、ついには各々の製造業が、可能な限りで諸部分に別れ、各職人の仕事が単純で容易になるところまで別れる。…われわれはまた、住民のほとんどが一つの仕事に従事しているような都市や市街では、その地に固有の物品は他のどこよりも良く安いことを見る⁸⁴…。これが貿易の利に繋がる。

* マーチン『東インド貿易の諸考察』

この冊子は全部で22章から成るが、分業の事例が出てくるのは第12章の中程である。そこに三つの事例が並ぶ。布製造、懐中時計製造、そして造船。布製造の仕事は、梳き、紡ぎ、織機組み、織り、染め、仕上げである。肝心の懐中時計製造については以下のように言う。

…懐中時計は極めて多様な仕事の産物である。一人の職人がいくつもの部品全てを作り、最後にそれらを一つに組み合わせることもできる。しかし懐中時計の需要が大変多くなると時計の諸部品と同じ数の人を恒常的に雇うことが出来、各人が特定の仕事に恒常的に割り付けられ、各人がケースだけ、他は車だけ、他はピンだけ、他はねじだけ、その他の何人かもそれぞれ固有の仕事だけ為れば済み、そしてこれら諸部品を一つに組み立てるのも一人の特定の恒常的な仕事となるならば、この人の作業は必ず、これらの部品全てを一人

で製造するのに比べて、諸部品の組み立てにおいて巧妙高速になるであろう。同様にピン工、車工、ねじ工、その他の部品職人も、一人が時計製造の多様な仕事全てに従事し技能に当惑する場合にくらべて、他に行なうべきことがなくて特定の仕事の技能に当惑するだけであれば³⁵必ず固有の仕事が完全急速になるであろう…先に引いたマカロック『経済学文献』は同じ文章を写していた。ここには需要が大きければ分業が進み、分業が進めば価格が下がって需要が拡大すると言う認識が明示されていた。

VIII. スペクテイター

あらかじめ「スペクテイター」そのものの説明が必要であろう。『マルクスエンゲルス全集』はこれを「1711年から1714年までロンドンで発行されていたイギリスの文芸雑誌」と注解している³⁶が、誤りである。正しくは、政治、道徳、宗教、慣習、教育そして文芸と言った社会問題に関する、日曜休刊の日刊オピニオン紙で、1712年12月6日に555号で一旦終刊になった。編集はスチールRichard SteeleとアディソンJseph Addison。一号一論文で通常無署名だが、終刊号に、ヘンリー・マーチンを筆頭に、ポーブを含む6人ほどの有力寄稿者名が書かれている³⁷。詩人数名の名があるので文芸誌と誤解したのかも知れないが、現物は雑誌でなく新聞だから、『経済学批判』の国民文庫版、岩波文庫版が「紙」と新聞扱いにしている方が正しい³⁸。

その中で、180号、200号、232号がマーチン筆だということはDNBが示唆し、マクラウド³⁹もこれに依拠しているから、以前から通説だったのである。DNBは特に1711年9月26日付けの180号は「疑いもなく彼の」ものとしているが、この号は英仏発展比較論である。ペティ『政治算術』を想起させ、マーチン是对仏ナショナリストだったのではないかと思わせる。DNBが「多分彼の」とした200号と232号はともに『経済学批判』の中で引かれている。1711年10月19日付の200号は、第二章「貨幣」C「流通手段および貨幣にかんする諸学説」の中で、諸商品の価格が流通貨幣量に依存するという学説の一つとして挙げられている³⁹。この号はマカロックが挙げていないから、マルクスが独自にスペクテイター紙に着目して通読し、関連のある記事を拾ったように見える。そうならこれもさすがマルクスと言うべきだが、あるいはマルクスは、ペティの場合同様マーチンとは響き合う

ところがあったのかも知れない。但し、記事の主題は人々の担税力であって、物価はそれと関連して補足的に出てくるに過ぎず、むしろこの記事がペティに關説していることの方が注意を惹く。

***最後に「スペクテイター」232号：－**

大筋は慈善・救貧反対論である。その論拠は、分業によって雇用を増やせば、賃金率は下がらないまま賃金コストが下がって製品価格が下がるから、雇用も増え労働者の実質所得も増えると言うものであって、これはマーチン独特の議論と見て良いが、この記事の特徴はそれを『諸考察』よりさらに強く押し出したことである。以下、当面関わる部分を訳出する。

…労働者の賃金は有用な全てのモノの価格の最大部分をなす。そこでもし賃金と並行して他の全てのモノの価格が低下するならば、賃金の低下した全ての労働者は生活必需品を前と同じだけ買えるであろう。これでなにか不都合があるか？しかし労働の価格は製造業に雇用を増やすことで引き下げられ、しかも人の賃金は前と同じ高さで続く。すばらしいサー・ウィリアム・ペティは、彼の著作のいくつかで事例を挙げている。私の記憶しているその一つが懐中時計の例で、それは当面の目的に極めて良く適合するので説明したい。一人で一つの時計を作るのは百人で百の時計を作るほど安くは作れない。なぜならそこに多くの仕事の種類があるからである。一人で全ての部品製造に従事することも出来る。しかしそれは極度に退屈な業になり、結局粗末に遂行されることになる。だが百の時計を百人で、ケースは一人に、文字板を別の一人に、車を別の一人に、ばねを別の一人に、そして他の全ての部品をそれぞれ特定の職人に割り当て、どの一人にも多種すぎて仕事が混交しないで一つの部品製造を高度の熟練と速度で遂行できるようにすれば、百の時計は一人で一つ作る時間の四分の一の時間で仕上げられ、全ての時計が四分の一の費用で、しかも各人の賃金が同じままで作れる。製造品の価格低下はその需要を増すであろう。同数の手が同様に支払われながら雇用される。同じ法則が職布でも造船でもその他どんな産業でも作用する。このように、製造業に手の雇用を増やすことは製品の価格を下げるだけであり、労働者は同じ賃金を得、その結果生活必需品をもっと多く買えるようになる。それゆえ一国の全ての階級が、労働人口の増加によって利益を得るのである。…

この、需要拡大→分業拡大＝生産性上昇・雇用増大→価格低下→需要拡大の好循環論は、

『諸考察』第12章の論理を徹底させたものと言って良いが、管見の限りでは、ペティ『政治算術』にも「政治算術別論」にも直接この形では書かれていない。私はペティの文章を全て読破しているものではないが、ペティの文体は一般には今の引用のように懇切で解説的なものではない。

以下、この文章を読解するに当たって必要な注意事項を列挙しておく。

1. 賃金率・賃銀稼得と賃金コストの概念が用語上確立していないから、読者側で適宜補って読む必要がある。

2. 賃金コスト低下はともかく、賃金率一定は論理的には成立しないが、マーチンにとっては不可侵の前提であり、『諸考察』において以上にこの「スペクテイター」において強調されている。不思議なことにマカロックもマルクスもこの賃金率一定の前提については沈黙している。

3. 需要拡大→分業拡大→価格低下の論理は『諸考察』に見られた。「スペクテイター」ではそれがさらに、価格低下→需要増大にまで擴げられた。

4. 「スペクテイター」における時計部品の名称はペティ「政治算術別論」の時計分業論のそれと、順序は異なるが品目名は同じである。自らも「すばらしいサー・ウィリアム・ペティの事例」などと言うから、マルクスのような速断を導くことにもなるが、需要との関係を重視する論理からすれば、この記事は『諸考察』の論理の拡張であり、ペティからの要素が皆無とは言えないものの、大筋はむしろ『諸考察』に由来する。文面は「政治算術別論」にもなく、『諸考察』にはそれ以上はないが、論理の筋をとれば、マカロックの解釈は基本的には正しい。

5. かくして、マカロックがスペクテイターの記事を誤って「憶測」したというマルクスの論難は理不尽である。牽強付会と呼んでも良い。マカロックに資料検討不足があることは事実だが致命的なものではない。マルクスの側には逆に、細かい曲解がいくつかあるばかりか重大な点での不注意か無知があり、論敵の云い分に対して、論理的にはおよそ追跡しきれない盲攻撃を加えていたのである。

IX. むすび

マカロックにも見落としはあったが致命的な欠陥ではなかった。マルクスの論難が基本的に成立しないことには変わりはない。どうせマカロックにケチを付けるのなら、搦め手戦術の、スペクテイター紙が混同したと誤読したといった類の、存否定かでない論点に対して言い掛かりを付けるのではなく、正攻法で、マカロックが「政治算術別論」を確認せぬままに、時計分業の事例はペティには存在しないなどと速断したのが誤りだと、正面攻撃をすべきだった。そうなら、自分自身の誤りに気付かされことにもなるが、同時に案山子首ではなく、小さくとも雑兵首は獲れたのである。

註

- (1) 馬場宏二『『資本論』も読み方—マーチン、マカロック、マルクス(1)—』大東文化大学『経済論集』82号、2004年2月
- (2) *大月書店版『マルクスエンゲルス全集13』1964年、中の『経済学批判』(杉本俊朗訳)
*『経済学批判』1966年岩波文庫、武田隆夫・遠藤湘吉・大内力・加藤俊彦 (日高普) 訳
*Karl Marx, *ZUR KRITIK DER POLITISCHEN OEKONOMIE* DIETZ VERLAG, BERLIN, 1951
- (3) ここは、『マルクスエンゲルス全集13』4ページ下段の編集方針、岩波文庫版「解説」、カウツキー版、原伸子氏の初版に関するご教示、から推定した。
- (4) ペティの著作集は、その後Chrls Henry Hull ed., *The Economic Writings of Sir William Petty*, Cambridge UP, 1899に纏められた。
- (5) 執筆に当たって 経済学史家桜井毅氏、原伸子氏の知見を伺い、関連文献を御教示いただいた。両氏に感謝する。
- (6) ジェームズ・スチュアート中野正訳『経済学原理』岩波文庫(一)128ページ
- (7) スミスはペティの名を全く挙げていない。賃金論の政治算術に依る箇所ではグレゴリー・キングとチャールズ・ダヴィナントの名を挙げてペティには触れない。エドウィン・キャンナンはキャンナン版『国富論』の編者註で、第一編第八章の、北米植民地で住民が20-25年で倍加すると言う部分と『政治算術』の対応、第二編第二章の、一国の流通通貨量は年生産物の五分の一、十分の一、二十分の一、三十分の一と見積もられていると言う部分と『賢者には一言をもって足る』の対応を指摘している。但しキャンナン版が現れたのは1904年である。19世紀のうちは、人々は『国富論』からペティの名に遡及し得なかった。
- (8) 『国富論』第四編第五章では「わたしは政治算術をたいして信用していないし、これらの算定のいずれについてもその精確さを保証しようとは思わない」とまで言っている。シュムペーターは、ペティが忘れられたのはスミスのこの文のせいであるような書き方さえしている。後出『経済分析の歴史』213ページ。
- (9) J.R.McCulloch, *Principles of Political Economy*, 1825, P. 377.
- (10) J.R.McCuLLOCH ed., *LITERATURE of POLITICAL ECONOMY : A Classified Catalogue*, London, Longman and Longman, MDCCCXLV. これには、計1000点にもなろうかという数の経済学文献が掲げられているが、中にペティの

『租税貢納論』、『アイルランドの政治的解剖』、『貨幣小論』、『政治算術試論集』 *Several Essays in Political Arithmetic*, グラント著といながらペティが貢献した『死亡率表の自然的政治的考察』の紹介を含む。マルクスが『経済学批判』註16で『人類の増殖その他に関する試論』として掲げたのは、正確には「人類の増殖に関する一試論並びにロンドン市の成長に関する政治算術別論」“An Essay concerning the multiplication of mankind together with another ESSAY in Political Arithmetick concerning the growth of the city of London” 1682で、上記『政治算術試論集』に含まれるが、その紹介は詳しくなく、『試論集』は後に『政治算術』になったと片づけられている。この辺りが、この際のマカロックの弱点になった。

- (11) ロッシャー、杉本栄一訳『英国経済学史論』1929年、同文館。原書は1851年刊なので、『哲学の貧困』よりは後だが『経済学批判』よりはすこし早い。
- (12) 『ドイツイデオロギー』にペティがボアギューエベール等と並んでブルジョア思想家の一人として挙げられている。これを著作に含めれば最初のペティ登場になるが、刊行意思、執筆時点、内容いずれも微妙なところである。
- (13) 1844年の『経済学哲学草稿』の経済学はまだ本格的な研究ではない。原氏のご教示に従ってMEGAで見ると、同年のパリノートからフランス語の経済学の抜粋があり、おそらく翌45年のブリュッセルノートに従ってマンチェスター・ノート中のノートIの冒頭に、ペティの「人類の増殖に関する試論並びに政治算術別論」を抜粋している。これがマルクスの本格的な英語経済学事始めである。その中に時計分業論や都市間分業論を含む。マカロック『経済学文献分類目録』はその後のノートに抜粋されている。因に私はこれまでMEGAをいじったことはなく、本稿で利用したのはすべて原氏がコピーで提示してくださったものである。
- (14) 山村喬訳『哲学の貧困』岩波文庫189ページ。
- (15) ジイド・リスト著宮川貞一郎訳『経済学説史』1936年、東京堂（原書は1926年版）には、ペティは、イギリスの初期自由主義者として一度名前が出てくるだけである（上巻79ページ）。
- (16) シュムペーター東畑精一訳『経済分析の歴史1－7』1955－62年（原書1954年）、岩波書店では、ペティは主として統計学者の観点から纏まって紹介されている（同2, 436－440ページ）他、ジョン・ロックやリチャード・カンティヨンと並ぶ頻度で多面的に言及されている。
- (17) エリック・ロール著隅谷三喜男訳『経済学説史』1951年有斐閣（原書1938年）は、上巻の20ページ分を費やしてペティを解説している。一人の学説紹介としては異例に長い、この部分にマルクスの影響が強いことは歴然としている。
- (18) 松川七郎『ウィリアム・ペティ』1967年、岩波書店、特にその194ページ。
- (19) A.Roncaglia, *Petty the Origin of Political Economy*, 1985. 津波古充文訳『ウィリアム・ペティの経済理論』1988年、昭和堂。この文献を知らずにいて、桜井毅氏に教示された。
- (20) 戦前版『経済学批判』に付された人名紹介では、ペティは「近代経済学の創始者、もっとも天才的でもっとも独創的な経済学者の一人」（マルクス）、となっているが、これは『反デューリング論』第十章の用語そのままの抜粋である。戦後版『マルクスエンゲルス全集』の人名索引での紹介は、「イギリスの経済学者、統計学者、イギリスにおける古典派ブルジョア経済学の創始者。「経済学の父で、ある程度まで統計学の創始者」（マルクス）」と、幾分客観主義的な書き方になっているが、それでも「経済学の父」は『反デューリング論』の抜粋、「ある程度まで統計学の創始者」は『資本論』第一巻第八章の「統計学の創始者ともいえるウィリアム・ペティ」の猿真似である。この種の人物紹介は、たとえばアダム・ファーガソンを、歴史的事実に明らかに反するにも拘らずマルクスの表現そのままに「アダム・スミスの師」としてしまふような教条主義が支配しているが、ペティ紹介の場合には、一旦『経済学批判』で書いた趣旨をマルクス自身が改めて定式化したものをそのまま使った、二重の意味の教条主義である。
- (21) *Considerations upon the East India trade*, 1701, London Churchill & Churchill. 同書については、馬場宏二『ヘンリー・マーチンの経済学』2003年、大東文化大学経済研究所を参照せよ。

- (22) J.R.McCULLOCH ed., *A SELECT COLLECTION of EARLY ENGLISH TRACTS on COMMERCE*, Londn Political Economy Club. 1856
- (23) この原文は “whose skill shall be pusled and confounded with variety of other business” と “if he shall have nothing else to pusle and confound his skill,than if he is also to be employ'd in all the variety of a watch” である。そもそも pusle という単語は手持ちの辞書には出てこない。英文学者佐藤史子氏から、OEDによって Pusle を Puzzle と置き換え得るのではないかと御教示を得たので、大意を取って本文のように訳してみた。因にこのマカロックの文章は、マーチンの1701年の原文の該当箇所のみである。
- (24) McCULLOCH ed., *A Select Collection of Early English Tracts on Commerce*, op. cit., P. XV
- (25) P.J.Thomas, *Mercantilism and East India Trade*, 1926
- (26) Christine Mcleod, Henry Martin and the authorship of ‘Considerations upon East India Trade’ in BULLETIN of the INSTITUTE of HISTORICAL RESERCH vol.LVI 1983
- (27) 時計部品についてのメモはMEGA Manchester Hefte 1845, Hef1,S. 11
- (28) MEGAによると『経済学批判』註16に含まれるマカロック非難は、既に1845年夏のマンチェスターノートに存在した。スペクテイター232号が時計分業の事例はペティの引用だと自称したのに対してマカロックがこの事例は自分が見た限りペティにはない、と否定したのを捉えて、「マカロック氏はほんとうに何も知らない」と書き加えている。Manchester Hefte ,S. 189. これはマカロック『経済学文献分類目録』の抜粋だから、このままなら、ちとオーヴァでもマルクスはマカロックの誤りを正確に衝いたことになる。何故ああ奇妙に捻れて行ったのだろうか。
- (29) 参照、馬場宏二前掲「ヘンリー・マーチンの経済学」、同『『資本論』も読み方』、同「古典派の比較生産費説」大東文化大学経済研究所『経済研究』17号、2004年3月
- (30) 『剰余価値学説史』には、ダヴィナント『東インド貿易にかんする一論』に対して、「この書はマカロックが引用している『東インド貿易にかんする諸考察』1701年と同じものではない」と断った文章がある（同書第四章六、国民文庫版2, 55ページ）。もともとマンチェスターノートにあった文を編者が移したものだというのが、公表予定のない初期のノートには、かように素直にマカロックの名やマーチンの初版名を入れた例もあるらしい。
- (31) 参照、馬場前掲『『資本論』も読み方』
- (32) 大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫、51ページ
- (33) MEGAのマンチェスターノート。
- (34) Sir William Petty, “ANOTHER ESSAY in POLITICAL ARITHMETICK, concerning the growth of the CITY of London” in *The Economic Writing of Sir William Petty*, op. cit., p. 473
- (35) *Considerations upon East-India Trade*, op. cit., chap. 12
- (36) 『マルクスエンゲルス全集13』、注解(八)
- (37) The SPECTATOR. DLV, December6, 1712
- (38) The SPECTATORのマイクロフィルム版は東京大学総合図書館内、国連資料センターが所蔵している。かなり読み難い。
- (39) 『経済学批判』、『マルクスエンゲルス全集13』136ページ

追記：布製造工程と時計部品名については阿部武司氏から有益なご教示を得た。福留久大氏の情報で、ペティの「人間の増殖に関する試論」が実際に書かれたか否かは疑問で、当面見られるのは「政治算術別論」の方だけらしいことが判った。両氏に感謝する。